

妻に頼りたい夫、夫を頼らない妻

昨年の第65回カンヌ国際映画祭で最高賞であるパルムドールに輝いた映画「愛、アムール」(監督ミヒャエル・ハネケ)を観て来ました。

『パリの瀟洒なアパートマンで悠々自適な老後生活を送っていた元音楽教師のおしどり夫婦。ある日、妻が発作(脳梗塞?)を起こし半身不随になってしまいます。病院に戻りたくないという妻の願いを聞き入れ、夫は老いた身ながら、献身的な在宅介護を続けていきます。しかし、病状は進み、気高くチャーミングであった妻が次第に病に冒されていく。最初は、車椅子の生活、次に顔面麻痺を患い満足に話が出来なくなり、寝たきりに。記憶も混乱し、娘も分からなくなってしまふ。そんな妻を、年老いた夫は、他人の手を借りることをほとんどせず、献身的に介護を続けていくが、逆に、妻は夫の関与を拒絶するようになっていき、時には夫が手を上げる事も。それでも 夫は妻を愛し、ついには妻を!』

この映画は、老夫婦の何処にでもある日常、何処にでも起こり得る現実を 淡々と映し出しているだけです。 そう 何処にでも起こり得る現実であり、日常なのです。 またこの映画は、けっして「老々介護」をテーマにした作品ではないと思います。

病気を患うまでは、対等のポジションであった夫婦の関係は、(むしろ高名な弟子を輩出した妻の方が上?) 介護される者と介護する者の二つの立場に分かれていきます。日本であれば直ぐに介護認定申請、訪問介護の出番となるところでしょうが、夫は自費で看護師を雇い入れるも、解雇してしまい、着替え・整容からシャワー浴介助、排泄(オムツ交換)介助、食事介助と、妻の世話に独り、のめり込んで行きます。

夫は、「妻には、自分がいなければ」と思い、懸命に介護を続けて行きますが、妻にとっては、夫に其処までしてもらふことは、感謝の域を超え、耐え難い感情の領域に入ってしまったのではないかと思います。 食べることも、水を飲むことも拒否し、無理やり口に入れられた水を夫に向って、噴出した行動。思わず手を上げてしまった夫。しかし、この行為には、妻の夫に対する感謝(愛)の気持ちの表れで、もうここまでで十分で、死なせて欲しいというメッセージでなかったのか、それを悟った夫は、ついに……。

昨年秋内閣府が、「介護が必要になったら、誰に頼りたいか」との調査をおこなったところ、男性の約55%が「妻」と回答し一方、女性は「夫」と答えたのは約27%で、「施設・病院などの職員」が約23%、「ホームヘルパーや訪問看護師」が約21%との結果が出たそうです。

この調査結果を、どう捉えるかは、人それぞれですが、妻のオムツを替えるのは、私にも、妻にも抵抗があると思います。



愛、アムール



病状がまだ軽い時、居間でくつろぐ二人



音楽教師として凛としていたありし日の妻